



友達の作文が新聞に！ 【特集号②】

ジビエ活用についての新聞を読ん
で
六年 猿渡 愛恵

わたしは、ジビエを給食などに活用
することに書かれていた新聞
を読みました。ジビエとは、家畜で
はない野生動物のことで、シカやイノ
シシが代表的です。

ジビエを給食に活用する目的は二
つあります。一つ目は、地産地消の取
り組みを進めるためです。二つ目は、
シカやイノシシなどが作物を食べて
しまうような農業被害を減らすため
です。

しかし、多くの都道府県が導入して
いるにも関わらず、農業被害はあまり
減っていません。それは、被害を出し
ていないシカやイノシシばかりつか
まえてしまつて、被害を出しているシ
カやイノシシをつかまえていない
からです。

対策としては、
里においてくる
野生動物をつか
まえるために、
人には無害なわ
なを開発するこ
とが大切だとわ
たしは考えています

【令和3年8月10日夕刊デイリー】



動物愛護センターで学んだこと
五年 中島 梨帆

わたしは遠足で「動物愛護センタ
ー」というところに行きました。「愛護
センター」というところには、親とは
ぐれたり飼い主に捨てられたりした
犬やねこがたくさん保護されていま
した。

愛護センターに着くと「命」につい
ての勉強をしました。ちょうしん器を
使って自分の心ぞうの音を聞きまし
た。初めて聞く心ぞうの音は「ドクド
ク」という音がしました。これが「命
の音」なんだと思いました。動物にも
同じ命があることを学び、楽しみにし
てた動物とのふれあいの時間がやっ
てきました。子犬や子ねこ、パピヨン
の「パピコちゃん」と遊びました。か
わいい犬やねこと遊んでいるときに
はやく里親が見つかってほしいと思
いました。そして愛護センターに来る
犬やねこたちが少しでも減ってほし
いと思いました。

今回愛護セン
ターで学んだこ
とをわすれず、動
物を大切にしてい
きます。

【令和3年8月10日夕刊デイリー】



感染させないために
六年 尾崎 文翔

ニュースでコロナウイルスの感染
がいつまでたつてもなくならないど
ころかどんどん増えているのを見ま
した。人の一回のくしゃみで約三千個
の飛沫が出るそうです。そこで私は、
次の二点の提案をします。

一つ目は、閉鎖した空間で、長時間
マスクをしない状態を作らないこと
です。大勢で小さい空間で話をした
ら、五分間の会話で一回のせきと同じ
くらいの飛沫（三千個）が飛びます。
そうなるのとたくさんの人に感染させ
る確率が高くなります。だから部屋は
かんきをして、話をする時は、マスク
をしないと飛沫を少なくできません。

二つ目は、外出から帰ってきたら消
毒をして手洗いうがいをすることです。
一つ目は、一番目でマスクをし、かんきをし
ながら話すことも大事なのですが、ド
アノブをさわった時にも飛沫が付
きます。だから帰ってきた時は、手洗
うがいなどをして、飛沫をなくすこと
が大事です。今、提案した二つはとて
も大事なのですが、やはり
極力外出しないで人に
感染させたりさせられた
りしないという思いが大切
です。

【令和3年8月10日夕刊デイリー】



日本一を目指して

五年 石神 晴

私が一学期特になんぼったことは極真空手です。私は、中村道場というところで極真空手をしています。土日も自主練を兄弟三人でしています。土、日は、とてもやさしく私のことをずっと応援してくれるお父さんにおしえてもらいます。私は、一年生の時に空手を始めました。最初にし合に出たときは、何回もこけたり、じょうだんをくらったり、はんそくをしたりして敗北してしまいました。二年生までずっと負けていましたが、三年生からどんどん練習の成果が出てきて、やっとしはんやお父さん、兄弟が教えてくれたおかげで勝つことができました。四年生の終わりでさらに気合いが入ったのでこのちようしでずっとがんばって、日本一位をねらっていききたいと思います。



【令和3年8月10日夕刊デイリー】

朝のボランティア活動

六年 新原 大胡

最近、ぼくががんばっていることは、朝のボランティア活動です。朝、早く学校に行きボランティア活動を毎日続けています。最初のころは、「ボランティアなんてどうでもいいや。」
「ボランティアなんてどうでもいいや。」
と思って家をおそく出ていました。しかし、それから三日後ぐらいにろうかを走っていることでおこられました。すると、先生から言われた、「六年生としての行動じゃない。」
「六年生としての行動じゃない。」
という言葉が頭の中からぬけませんでした。ぼくは、先生に、「朝のボランティアを毎日続けます。」と最初に言ったことを、思い出し、心の中がもやもやしました。おこられた日から、ぼくは、ボランティア活動をやつて、口だけじゃないことをしようめいしたいです。
これからも朝のボランティア活動を続けて宮崎一の六年生を目指したいです。



【令和3年8月10日夕刊デイリー】

空

六年 山崎 大翔

空を見上げた
空は青かった
白い雲が浮かんでいた
雲はどこまでもぼくを追いかけてくる
空を見上げた
空は暗かった
ポツポツと空が泣き出した
ぼくをぬらすように泣き出した
空を見上げた
太陽の光で明るくなった
ぼくの気持ちも明るくなった
空はみんなの気持ちを明るくする



【令和3年8月14日宮日こども新聞】

【文責：鈴木 泰昌】